

小説国際プラント・ビジネス戦争（十三）

杉田望

コアトリクエの女神

その夜、今田は夢をみた。

あれは確か太陽神殿のはずだ。何千人か、いや何万人かも知れない。太陽神殿を取り囲むようにして集った群衆は、歓喜の声を上げながら、儀式の始まるのを待っているようだった。だれも彼も、陶酔にひたっている。

太陽神殿のさらに奥には、石を積み上げてつくられたピラミッドが不気味な表情でそびえ立っている。天を突くような高さだった。そのさらに上には太陽が、終末の到来を告げるかのようにうす黒い焰を上げて、燃え盛っていた。黒い焰を上げる太陽なんぞ、みたことがない光景である。地平は太陽の焰で、真赤に染め上げられていた。



群衆は何かを待っている。今田は、不安と恐怖にかられながら、群衆とともに儀式の始まりを待っていた。群衆の歓呼があがった。やがて仮面をかぶった戦士に引き立てられて、人身御供が群衆の前に姿を現した。群衆のどよめきが波をうつて高まり、彼らは残忍な目を光らせ、これから始まる儀式への期待感で、いっそう鋭い歓喜の声をあげた。

群衆は戦士と同様に、仮面をかぶっていた。その仮面に今田は見覚えがあると思った。あの仮面は、妻幸子の顔ではないか。さらにあの仮面は、よくみると新井の顔だった。

今田は仮面の顔のほとんどこに見覚えがあるような気がした。青木の顔もある。なぜ、こんなところにいるのか、カール・ルビンスの顔の仮面もあった。あれは確か船橋の仮面に違いない。声をかけてみたのだが、彼らは儀式の始まることにすっかり興奮し、今田の存在などに気がつかないようだった。どうやら素顔でい

るのは、今田ひとりだけのようだ。

太陽は時折、真白な光を放ったが、再び赤黒い焰に包まれた。狂気の儀式が、この悪魔の神殿で何度となく繰り広げられたのか。犠牲者たちの屍が、累々と太陽神殿の広場に横たわっていた。どうみても数十人の犠牲者が献じられたのであろう。その犠牲者たちの生首が太陽神の祭壇に飾られていた。

最初の犠牲者は男のようだった。大変勇敢な戦士であつたに違いない。形通りの儀式にそつて、戦士の肉は喰いちぎられていた。祭壇の台座に供えてあつた生首は、胴体から断ち切られ、血糊がべつとりと頭髮にこびりつき、目は空をにらんで、かつと見開いていた。だれかに似ている。木内のもあつた。思わず視線をそらした。そんなはずは絶対にない。今田はあわてて打ち消した。

太鼓がひととき大きく打ち鳴らされた。



新たな人身御供が今田の視野に入ってきた。女性だった。それも若い。素肌のうえに真白い麻の布をはおり、栗色の髪が眉先に揺れて、垂れていた。女性は真直に背筋を伸ば

し、ピラミッドの頂上に続く階段に素足をかけた。一步、階段を進むたびに、群衆は熱狂的な声をあげた。やはり仮面をかぶつた戦士たちが、彼女の歩みにあわせ、鼓膜をつんざくような太鼓の音を響かせた。

人身御供は階段の途中で立ち止まり、ふっと、振り返った。女性の口許に笑みがこぼれた。今田の背筋に悪寒おかんが走った。衝撃だった。喉は干上がり、声にはならないが、叫び声をあげた。

「いくんじやない、戻れ、戻れ、戻るんだ。元子っ」

まぎれもなく元子だった。そう叫んだつもりなのに、声にはならない。必死でピラミッドに近づこうとしたが、人の彼に押し返された。さらに今田は人の波で、遠ざけられた。身動きできない。再び元子と呼んだが、今度は群衆のどよめきでかき消された。元子は赤黒い太陽の光りに照らしだされながら、頂上に近づきつつあった。

とうとうピラミッドの頂上に立った。待ち受けた神官が、人身御供の手をとり、

祭壇の前にひざまずかせた。悪霊の清めの儀式が始まった。神官は素肌の上に、わずかにまとった麻の布を、はぎとった。太陽が心なしに、白く光った。元子の裸体が、太陽に照らし出されて、眩しく光った。今田は息をのんだ。なんと清清らかな美しさだ。

彼女は従容として神官に従い大理石でつくられた祭事の台座に横たわった。神官は黒曜石のナイフを右手にかかげ、豊かな盛り上がりを待つ、犠牲者の胸に突き立てようとしていた。神官の口許に残忍な薄笑いが浮かんだ。元子の白い肌に真赤な鮮血が走った。

「やめるんだ、やめてくれっ」

そこで、今田は夢から覚めた。悪夢だった。今田の体は、びっしょり寝汗で濡れていた。今田はおもいっきり、自分の顔を叩いた。それで、ようやく夢であることを確かめた。

ふと、みると傍に寝ているはずの元子の姿がない。手洗いにでもいつているのかと思った。が、その気配はない。元子と呼んでみたが、返事が返ってこなかった。不安になった。今田はベッドの枕元のサイドテーブルからタバコを引き寄せ、深ぶかと吸い込んだ。

サイドテーブルの電気スタンドの下に、元子が残した走り書きがあった。それを薄明りのなかで、すかさずようにして読んだ。

先に出ます。あまりぐっすりお休みだったものですから。ゆっくりお休みなさいね。今度、またいつものところで、お待ちします——元子

今田はかすかに微笑んだ。そういうことか、そう呟いて安堵した。それにしても、嫌な夢だった。部屋には元子の香りが残されていた。また、今田は元子の肌が恋しくなっていた。元子が寝ていたあたりのシーツを、そっとさすってみた。体温が残っている。シーツの乱れは、昨夜の愛の激しさを物語っているようであった。

それから一週間後。約束の時間の午後七時、新宿西口近くの喫茶店で元子を待っていた。そこは喫茶店というより、カフェバーといった方が正確かもしれない。店は若向きのつくりで、今田のような中年の男にはちょっと、ひとりでは入りにくい雰囲気がある。客筋もだいたい、若い男女のカップルがほとんどだった。

なぜか、この店を元子は好んだ。二度目に会ったときから、このポエムと名付けられたカフェバーが選ばれた。今田が電話をしたとき元子は、新宿西口のポエムを会う場所として決めたのである。

このポエムで小一時間ほど、とりとめもない話をしながら時間をすごした。二度目に会ったとき元子は、今田に特別の感情を示さなかった。元子は、いつもの明るく、よく笑う普通の若い女性だった。あの夜今田にみせた陰惨で、ウェットな表情は消えていた。あのときのことなど、記憶の片隅にもないように振るまつた。

たぶん、あのとき二人は、気が動転していた。だから分別もなくあんなことになったのだろう。ほんの行きずりに出会った男女の絡みのようなものだったということか。元子の変化に今田はどぎまぎするだけだった。はたからみても、この二人が肌を確かめあった関係にあるとは、とてもみえはすまい。今田は淡い恋心を打ち砕かれたように思った。

元子は突如として、あなたの家を見たい、といい出した。妻の幸子が家を出て金沢に住んでいること、だから自分はひとり暮らしをしていることなどを話したせいに違いない。広いだけで、古い作りの家だ。みせるような代物ではない。最初、今田は渋った。結局、元子に押されて、自宅で食事をつくることになった。食事は二人でつくった。まるでままごのようだった。今田はとっておきのワインを出して、食事の気分を高めた。食事のあと二人は今田の父の書斎に入った。元子の目元がほんのりと赤らんでいた。二人は書斎のソファに腰を降ろし、食後のブランディを楽しんだ。

書斎は生前、父が使っていたままの状態に保たれていた。書斎の壁にはめこまれた書棚には、ぎっしりと本が詰め込まれてあった。フランス文学を専門にしていただけに、その方面の蔵書が多い。元子は興味深げに、丹念に蔵書に目を通していった。元子は快活だった。

「読みたい本がたくさんあるわ。お借りしてもよろしいかしら……」

蔵書のなかから一冊を取り出して、そういった。そういえば、元子は学生時代にフランス語を専攻したといっていたのを思い出した。取り出した本は、フランス語の原書だった。どうやら今田には、ほとんど関心のない内容が書かれているようだった。

「誰が読むわけではない。かまわないから持って帰ったらどうかね」

「ありがとう」

それだけいうと、元子は熱心に本を読み始めた。ときおり元子は細い指で、栗色の髪をたくし上げた。小さな肩がかわいかった。今田はうしろからそっと触れた。最初は軽い抵抗だった。今田は本気になった。顎^{あご}をおさえて、唇を求めた。

「いや……」

手にした本が、バサツと床に落ちた。今田はかまわず元子をソファに押し倒した。元子は意外なほど、強い抵抗を示した。きつとした顔で今田をにらんだ。そして、乱れた服装を整えた。

「そんなつもりはないの」

そのとき、今田は自分の衝動的な本能を恥じ、いたく傷ついた。好きなひとでもいるのか、こういう場面で男が口にする常套句である。自分を傷つけた元子をいたぶりたい、そんな気持ちに今田は駆られた。どんな反応を示すか、確かめてみたいとも思った。

「木内のことが好きだったんじゃないか」

そういった瞬間、今田はつまらぬことを口にしたと後悔した。

「とつても……だけどあなたのように、あっさりと私を抱いてはくれなかったわ。木内課長……彼はとつてもストイックだったの」

今田は絶句した。死者に対する嫉妬を感じた。今田は黙って、ブランディをおる以外になかった。元子は床に落ちた本を拾い上げ、頁をめくっていた。別段、読む素振りはない。この場の気まずい空気に耐えられなかっただけのようだった。元子は黙って立ち上がった。

今田は井の頭通りまで、元子を送った。相変わらず二人は寡黙だった。タクシーの空車が近づいてきた。元子が手を上げた。タクシーが二人の前に急ブレーキで停車した。

「怒った？」

そういうと、元子は今田に軽い口づけをした。タクシーのドアが開いた。元子は滑り込むようにして、乗った。真直ぐ、正面を見つめたまま、今田の方は振り返らなかった。横顔が冷たく輝き、泣いているようでもあった。車の姿が消えるまで、今田はその場に立ち尽くしていた。

元子と四度目に会ったとき、彼女の誘いは強引だった。用事があったが元子のために断ることにした。その日もやはりこのポエムが選ばれた。いつもだと、女学生がよゆきに着るようなしゃれた洋服を好む元子だが、その日は大人びたワンピースを身につけていた。化粧も少し濃い目かと思えた。元子は席につくなりいった。

「今日は抱いて」

真顔だった。今田は狼狽ろうばいした。あわててまわりをみた。そんな自分に自嘲しながら伝票をつかんで立ち上がった。この前のこともある。元子がどんな気持ちでそんなことをいったのか、今田には皆目理解ができなかった。とりあえず元子の気持ちを知りたい。食事でもしながら、ゆつくりと話そうかと今田は考えた。こういう場合、少しゴージャスな雰囲気がい。ホテルのレストランで食事をすることに決めた。

別に元子と相談をしたわけではないが、新宿のホテル・ハイアットに車を向かわせた。元子は素直に従った。車のなかでの元子は陽気にはしゃいだ。青木部長は定規をあてても真直ぐに線が引けないこと、同じ課の成田は、背が高いため普通の布団では足が出て、冬が困るといつていたことなど、他愛ないことをおもしろおかしく話しては、笑いこぼれた。が、その陽気さは、これから始まるようにしている大人の男女の愛の交歓に、期待を弾ませたものでないことは、今田にもわかっていった。

「いますぐに抱いて、それじゃなければい」

レストランに入ろうとしたとき元子が今田の腕を強く引き、そういった。今田はちよつと困った。それは単なる甘えではなく、本気でいつているようだった。激しく揺れ動く女心に、今田はすっかり翻弄される思いだった。今田は頷くしかなかった。

あのとときの元子に比べ、まるで別人のようだった。唇を激しく合わせ、舌を絡めてきた。そして元子は今田のネクタイをゆるめ、ワイシャツのボタンをひとつひとつ優しく外した。まだ、幼さの残る未熟な燃え方は、あのとときと変わらなかった。が、たった三度目の交際にしては、二人の身体はよく馴染みあった。二人は多少のゆとりをもって、互いに高めあった。

幾度か肌を重ねたあと、元子は今田の胸に覆いかぶさるようにして、今田の瞳

をじいつと覗き込んだ。今田の胸で元子の乳房が形よく弾んだ。滑らかな柔らかい感触だった。首に両手をおき、締める真似をした。少し力が入った。今田はうつと唸った。

「私をみて……好き、一緒に死にたい」

元子のほほに涙が伝わった。今田の胸元に幾筋か流れ落ちた。

「そうか」

とだけ今田はいった。寝室の睦言むごんと今田は理解した。それにしても切道悪があるいい方だ。それより二人が今後どうなるのか、元子と話したいと思った。元子は積極的な反応をみせなかった。

「食事をして、それからデイスコに行きたい」

元子は再びもとの明るい娘に戻っていた。化粧を直している元子の後姿に成熟した女の影がみえた。強く肩を抱き締めた。振り返って唇をあずけてきた。ながい接吻だった。

デイスコはホテル・ハイアットのすぐ近くにあった。ここは朝方までやっている、と元子がいった。つん裂くようなビートのきいた音楽が耳に飛び込んできた。目を凝らさなければ、まるで何も見えない薄明りだった。レーザー光線が鏡の壁に反射した。まばゆく元子の顔を捉えた。その顔がコアトリクエの女神像に似ているように見えた。

元子はリズムに乗っていた。音楽は少しスローテンポになった。確かこの曲は JANNY STRIKIE UP THE BOND のように思えた。知っている曲に出会ったことで勇気づけられた。今田は踊りの群のなかに入っていた。元子がつこり笑って今田の前で身体をひねりながら踊った。二人は向かいあって、激しいロックのリズムに身をまかせた。

「こら、お腹を引っこめなさい」

元子が軽くにらんでいた。明らかな冗談だった。今田は笑って応えたが、改めて元子との年齢の差を感じさせられた。レーザー光線のなかときおり浮かんでは消える元子の姿が、だんだん道のいていくように思えた。得体の知れない不安が今田を襲った。今田はおもわず元子を抱きしめた。元子は驚いたような表情をしたが、逆らわなかった。まわりのだれもが二人には無関心だった。

今田はふと、時計を覗いた。もう、一時間も待ったことになる。まだ、元子は姿を見せなかった。少し今田は苛立った。どうしたのか。約束を破るような娘ではない。コーヒ―は冷め切っていた。隣の席では、幾組みかのカップルが席につき談笑を交わし、そして去っていった。中年の男がひとり寂しくコーヒ―をすすっている筈なんぞ、絵にもなりはしない。今田は腹立ちを覚えた。

ポエムの窓の外に目を落した。もう、秋風が立ち始めているように思えた。長いしなやかな髪をなびかせて、そこに元子が現れたような気がした。確かに似ていた。が、元子の歩き方にはもっと弾みがあつたし、それにキュートだった。やはり違っていた。髪の高い女性は、急ぎ足でポエムを通りすぎ、雑踏のなかに姿を消していった。

今田の脳裏に元子との情交の場面が浮かんできた。きめ細かな肌、よく弾むしなやかな身体。元子が笑いながら近づいてくる。今田はあわてて、元子を掴もうとした。

が、元子のイメージはどんどん遠のいていくばかりだ。表情さえも定かではなくなつた。霧のなかにかすんでいくような頼りなさだった。今田は大きく頭を振って妄想をうち消した。

今田はもう一度時計を確かめた。もう九時だった。すでに二時間待ったことになる。腹立ちは静まり、今度は不安が頭をかすめた。元子があのとに残したメモを覗いてみた。間違いなく約束の時間は、今日の午後七時である。

この時間だとすれば、もう会社には残っていまい。自宅に電話をいれてみたが、激しく呼びだし音が鳴るだけだった。

考えてみれば元子のことは、今田にどの程度わかつていたというのか。元子の交友関係、元子の親友、そして両親や家族、趣味のこと、たとえば好きな音楽は。今の仕事に満足しているのか。喜びと悩み。悩みを相談する相手。恋人の存在、そして木内との関係。

そう考えてみると、彼女のことは何もわかつてはいないではないか。今田は元子が遠い存在であることを、改めて思い知らされた。二人の関係はあまりにも性急だった。

元子との間に交わされた言葉の数かずを思い起こしてみた。やはり元子の原像は浮かび上がってはこなかった。肌を合わせた淡い記憶が残っているだけだ。そ

れとても、こうしているうちにだんだんと薄らいでいくではないか。掴みどころのない、元子の幻影はどんどん遠ざかっていくのを今田は実感した。

今田の心は乱れてきた。あの我儘娘に男が翻弄わがままをすめされている・追い詰められた気分・自分は彼女に余りにも多くのことを、求めたともいうのか。男を狂わせ、そして冷たく突き放す。怒りさえも覚えた。コアトリクエの女神はあまりにも理不尽だった。

四十男が何というさまだ。いい加減にしろ、今田はそう自分にいい聞かせた。この時間だ、もう来はすまい。今田は元子のことを考えるのをやめることにした。そう思うと、今度は自動車事故にでも合ったのではないか。彼女の身边に何事が起こったのか。不安が頭をかすめた。

たぶん、そうではないか。不安が増幅されていく。そういえば、あのとき一緒に死にたいとか、口走っていた。自殺……まさか。今田はとんでもないことを考えている自分に気がつき、あわてて打ち消した。

今田は珍しく深酒をした。新宿から銀座、六本木から再び新宿。したたかに酔った。いつのまにか元子のことが消えていた。気がついたときには、新宿のホテル・ハイアットのベッドに横たわっていた。なぜ、このホテルにいるのか、定かには覚えていなかった。

翌日の朝、今田はほとんど無意識で十三階の鉄鋼事業本部のフロアに立っていた。やはり元子の姿はなかった。後任者の決まらない中南米課の課長席とその並びの端にある元子の席がぼつんと空いていた。なぜか、課内がざわついていた。「どうしたんだ、今田君」

後ろから声を掛けたのは、青木部長だった。

「いや、ちよつと木内に……」

「気持ちの悪いことをいうもんじゃないよ。彼は……」

青木にそういわれて、今田ははつと我にかえった。

「悪いことは続くもんだね」

「といいますと……」

「実をいうとこの課の加納という若い娘が睡眠薬の飲み過ぎで、今朝方病院に運ばれた……御存知のような事情で課長席は空席のままだし、それで取り込んでいるというわけだ」

「で、死んだ……のですか」

「いや、発見が早かったので、命には別条ないようだ。ただ意識は……」

「回復していないのですね。それで自殺未遂……ですか」

「それはわからない。たぶん睡眠薬の飲み過ぎ、事故だと思うんだが」

青木は怪訝^{けげん}そうな表情をつくって、そういった。衝撃と安堵感。複雑な感情が今田を襲った。青木の話だと、発見したのは日東経済研究所に勤める前原知子と聞いた。彼女は大学でのクラスメートで、元子にとって数少ない親友のようだ。今田には聞き覚えのない名だった。

「昨夜一時頃だったか、その前原さんのところに加納君が、電話をしたらいいんだ。時間が時間だったし、それにどうも様子がおかしい。いつもの彼女ではない。そういうことで、彼女が車を飛ばして……それで発見した、ということらしいんだが」

「よかった。でもなんでまた、睡眠薬なんぞを……」

「それはこつちがいたい台詞^{せりふ}だよ。若い女性は情緒的に不安定だということはあるが、それにしても彼女らは我われにとって異星人のように思える。どうやら理解を超えた存在のようだね」

今田は黙って頷いた。

「君、顔色が悪いね。木内君のこともあったことだし、充分、身体には気をつけてもらわなければ困る……ああ、それはそれとして、もめている例のメキシコの案件だが、今日の常務会で正式に決定されるそうだ。まあ、結論は玉虫色だと思うけどね」

今田はその言葉で、ビジネスに生きる人間として、現実の世界に引き戻されていた。タフで商売熱心ないつもの今田の顔がそこにあった。

それでは、といい残すと、今田は急ぎ足でフロア中央のエレベーターに向かった。その後ろ姿を青木が幾度も首をかしげながら見送っていた。

今田は自分の席につくなり、両手で思いつ切りほおを叩いた。気分転換する際のいつもの癖だ。机の上に積まれた書類に目を通し、今度は机の横にセットしてあるターミナルボードのキイを叩いた。電子メールを呼び出すためだ。特別メッセージは入っていなかった。

次に今田は長谷川たちと、オーストラリアの客先から出ている金利引き下げ要

求にどう答えるか、午前中、いつぱいかけて協議した。客先の要求は、利子払いがその後の円高で負担が大きくなっているので、為替ルートの換算率を改定したというものだった。

すでに契約済みの案件である。だから突っぱねようと思えば、できない話ではない。が、そうはできない難しさがあった。同じ客先との間で、メタノール火力発電のプロジェクトが商談ベースに乗っていたからだ。直接の担当であるだけに長谷川は異論を差し挟んだ。

が、今田は契約を遵守することが、お互いの信頼関係を結果として強めることになるはずだ、という結論を出した。結局、難色をみせていた長谷川も納得したようだった。その線で客先と交渉する方針を決めた。再び席に戻って、ほっと一息ついたとき、電話がけたたましく鳴った。

「エネルギー機器部の今田です」

「あのう、私、前原知子と申しますが……」

「前原知子さん……？」

今田はすぐ思い出した。青木に聞いた名前だ。そう元子の大学のクラスメートで、自殺を図った元子を病院に運び込んだ、あの前原知子だということはすぐにわかった。

率直に、ありがとう、といったかった。が、元子との関係からいっても、自分の口からありがとう、というのになにか唐突でもある。何というべきか。今田はどう切り出せばよいか。少し迷った。

「昨夜はとんだことでした……」

「ご存知だったんですね」

「ええ、それで容体方は……」

今田はまわりを気にして、押し殺したようないい方をした。

「まだ、昏睡状態にありますか、危機は脱したようです」

「見舞いに伺わなければ、どちらの病院に」

「お止めになったほうが、よろしいのでは……」

「なぜですか」

「午後、お母さまがお見えになることになっていますし……」

今田は言葉を呑んだ。元子との関係がその一言で、完全に絶たれたようにも思

えた。しかも知子は二人の関係を何もかも承知しているようだ。知子は言葉少なにいったが、いわんとしていることは今田には痛いほどわかった。どんな顔をして彼女の母親の前に立てばよいのか。が、じっとしていることも辛いことだった。「そうですか」

「実は今田さん宛に書いた元子の遺書を持っているんですが」

「私宛の……」

「そうです。私の独断で持ち出したのです」

「わかりました。ご迷惑でなければ夕方にでもお目にかかりたい」

会う場所はポエムと決めた。知子もポエムを知っていた。知子と会うことに、今田は奇妙な興奮に駆られていた。状況を考えれば、なんとも不謹慎なことにも思えたが、やはり元子のことがもう少しわかるかもしれない。そんな期待感があったからである。まだ時間が早いせいか、客の数は少なかった。

少し遅れて知子が姿をみせた。知子は伺うようにして、店内を見渡した。肩から少し大きめのハンドバッグを下げ、小脇に書類封筒を抱えていた。キャリアウーマン風だった。幼さが残る元子に比べ、大人の世界でもまれた成熟した女の落ち着きがあるように思えた。今田は立ち上がった。

「先ほどはどうも……」

今田にはある種の照れがあった。

「前原です。始めまして」

「どうも、いろいろと……今日は休まれてしまった、ということですか」

今田はちぐはぐで、ぎこちない挨拶をした。

「三時頃でしたか。元子、意識を回復したそうです。一週間もすれば退院できる、先生はそうおっしゃっていました。でも元子、だれにも会いたくないといってるそうで、お母さまも困っておいでのようにでした」

「それはそうですね。でも本当に良かった」

「大人の恋愛って難しいものですね。とくに妻子ある男性との場合は……」

非難めいた口調に聞こえた。それもそうだろう。妻とは別居同然といっても今田はれっきとした妻子持ちだ。元子を自殺に追い込んだ直接の責任はないとはいっても、こんな場合、社会的非難は覚悟せねばならない。今田は自分の自制的ない欲望を恨めしく思った。

「あら、ごめんなさい。そんなつもりでいったんでは……」

「いや、いいんです。ただ、なにもしてやれないのが残念だ」

「そんなに深刻に考えられない方がいいですよ。あの子、わりあいけるっと立ち直るたちですから。そう、これが元子が書いた遺書です。正確にいえばあの子、いま生きているんですから、遺書とはいえないかもしれませんが、ともかくお渡ししておきます。でもあの子、後で怒るかしら、出すぎたまねをしたといつてね。それでもいいわ」

「お預りします」

今田は短くいった。

「それではまた、元子様子を連絡します」

知子はそういうなり、立ち上がった。ほぼ、二十分ほどの時間だったか。短かった。今田はもう少しだけ知子と話してみたいと思ったが、余韻すら残さず知子は去っていった。

今田は元子の遺書に目を通した。書き出しは、「また、あなたを怒らせてしまった。ごめんなさい」から始まっていた。筆跡は繊細だった。ただ、女の字としては、筆圧がかなり高いようにも思えた。

いま、音量を絞り込んでマドンナのクレージー・フォ・ユーを聞いているところです。縫いぐるみのネコさんにさようならをいいました。ネコさんじいっと、私をにらんでいます。悪い子だといって。

本当にごめんなさい。でも、こうするのはあなたのせいでも、木内課長のせいでもありません。嫌になったのです。世の中って、そんなには期待もしていませんでしたが、こんな辛く悲しいものだと考えてもいませんでした。きっと我儘我なのですね私って。

あなたとは短いおつき合いです。私には楽しかった。でも、あなたにはきっと嫌な女に見えたでしょうね。気紛れで、我儘で、子供っぽくて。あなたは本当に優しい人でした。それに辛抱強かった。感謝します。

木内課長のこと、本当に好きでした。でも、いつもお仕事の話ばかりで、あの人には私のことは振り向いてもくれませんでした。だからあの人が亡くなったときは言葉では表わせないショックを受けました。きっとあなたとあんなことになっ

たのは、あなたに木内課長の面影をみたからだと思います。こんなことを書くあなたには残酷かしら。

でも、あなたは私が考えていた以上に素敵で、素晴らしい方でした。だんだん好きになっていくのが、とってもよく自分でもわかりました。あなたを知ることができて幸福だったと思います。ただ、私、考えてみました。あなたの愛情に答えられるような女であるかどうかを。答えは否定的でした。

それに会社の人間関係にも疲れ果てました。男の人たちどうしてあなんでしょう。か。上辺だけの優しさ、そのくせ残忍で、ひとを蹴落すことになんの良心も感じないひとたち。仕事師と呼ばれるあなたのことも、そんな目で見ていたが、音外にナイーブなところがあるのに驚きました。

死ぬことの意味なんて、説明のできるものではありませんわ。ただ、生きていくこの意味を見出せないだけです。あなたと今日、会っていれば、きっと違った選択をしているかもしれません。でも、これが私の運命なのでしょう。

さようなら

今田は何度も文面を読み返してみた。遺書に書かれている内容から判断する限り自殺を図らなければならないような原因はみつからなかった。ときとしてだれもが考え、悩むようなことである。元子はふつと魔がさして、あんな行動に走ったのではあるまいか、と今田は思った。それにしても助かってよかった。今田は次第に牧われたような気分になっていった。

確かに悪夢だった。が、結局あれは夢でしかなかった。コアトリクエの女神はゆつくりと今田の方を振り向き、微笑みかけたように思えた。そうはいつでも元子にとってこのことは大きな痛手のはずだ。知子はああはいていたが実際、立ち直るまで相当な時間が必要だろう。それにこの俺との関係もどうなるというのか。そう考えると不安も残る。

人間が持つ感情の不確かさであろうか。今度はまったく無関係に今田は、ふつと大園から入った電話のことを思い出した。あれはちょうど、退社時間の迫った六時少し前だった。大園は今日、常務会で例の案件が棚上げにされたといった。た。

大園の話し振りだと、山田社長の粘り腰と大阪在勤の水上副社長の策で、事態

が一転したようだ。そのことを思い出したとき、今田は明らかに鬱の状態から今度は躁の状態に気分が変わっていく自分に気がついた。今田はそんな自分が憐れに思えて、思わず苦笑してしまった。

(つづく)

小説 国際プラント・ビジネス戦争（十四）

杉田望

情報操作

ドアのノブに手を掛けたとき、部屋のなかで電話が鳴った。小川は急いで部屋に入り、乱れた呼吸を整えてから受話器を取り上げた。聞き覚えのある声が、電話の向こうから入ってきた。

「やあ、オガワ」

いきなりスペイン語が飛び込んできた。電話の声はレピカだった。定期連絡のための電話だ。二人はほぼ一週間に一度のわりあい連絡をとりあっていた。いつものことだが、レピカの声は明るく、弾んでいた。

「さっそくだが、借款交渉の進捗状況しんしゅくを聞かせてくれないか」

「デフォルト宣言以降、どうも東京の金融界は慎重でしてね。難しい」

「うん、それはわかる。だが、五十億ドルの話はともかく急がなければならないんだ。今度のプロジェクトの鍵はこの借款にかかっている。くどいようだが、できるだけ早くメドをつけてもらいたいんだ」

気持ちはわかるにしても、レピカの催促の仕方はいかにも性急である。何しろ、総額五十億ドルの規模に上る借款の話だ。巨額なクレジットである。そう簡単には結論が出ないのも当然だ。

レピカは問題の本質を本当にわかっているのか、小川には疑問に思えた。

「いまの状態で、借款の話を進めるのはとても無理ですよ。だから次に別な手を考えておかないと、これ以上、話を進めることはできない。実をいうと今日も鎌谷会長に会ってきたのですが、彼もいまの状態じゃとてもこの話を公式な場で議論することはできない、そういつていた」

渋い表情をつくってそういった鎌谷の姿が脳裏に浮かんた。最初のころに比べ鎌谷の態度は慎重だった。それもそのはずだと思った。デフォルトを宣言した直後である。今は異常事態というべきであろう。



鎌谷の立場からすれば、慎重にならざるを得ない。

「そうか、鎌谷会長がそういうことであれば、別なルートを探してみる必要があるんじゃないのかね。鎌谷会長以外では、たとえば千代田銀行の石井頭取などにはまだ会っていないのかね。彼らがどういう反応を示すか、興味がある」

「ちょうど三日ほど前、石井頭取と会ってみたのですが、彼も鎌谷会長からこの話は聞いているとかいっていた。ただ、非常に慎重でして、絶対に言質を与えるようなことはいわない、とてもまともに話ができる雰囲気ではありません」

「そうか……そうすると、東京での調達は難しいということか。そうだとすれば、君がいうように、別な手を考えなければならぬだろうね、うーん……いっそのこと天然ガスの存在自体を公表してしまう手もある。ただ、その場合アメリカがどう反応するかだが……」

「そりゃ妨害に出ることは確実だと思いますよ。ただ、メキシコに天然ガスがあることは日本のエネルギー専門家の間ではかなり広く知られているようですし、あなたがいわれるように、この際ですから公表した方が、案外借款の組成は簡単にいく可能性もあると思うのですが」

「それも一案だが、ちょっとリスクな感じもしないではない。やはりこの場合、このことは 噂 として、情報が流れた方が効果的かもしれないね。アメリカに対する配慮を考えれば、メキシコ政府が直接公表することはできない。たとえばマスコミとかを利用して情報を流す。どうだろうか、そういうことは……」

「そうですね、その線でやってみましょうか。ただ、どの程度まで内容をリークするかですが、単なる 噂 ということだけでは、日本のマスコミも乗ってこないだろうと思うのですが、そこらあたりの判断が実際難しい」

「そうだね……難しいところだ。しかし、こういう場合は、臨機応変にやるしかないだろう。その判断は君に任せることにするので、そこら辺りはうまくやってもらいたいのだが」

「わかりました。心当たりがあるので、それでやってみます」

「それはそれとしてニック社に依頼してある例のメタノール・プラントのフィジビリティスタディのことだが、どうなっているか、作業の進捗の具合をもう一度、チェックしてくれないか」

雑音が入って、レピカの声は聞きにくい。そんなことはまったく無頓着にレピ

力は早口でまくし立てている。肝心なことを聞き漏らしたらまずい。小川は神経を集中させて、もう一度聞き直してからいった。

「来週中にも連絡をとってみたいと思っています」

「ぜひ、そうしてくれないか」

「ところで、テクニカル・ミッションの日程は決まりましたか」

「うん、まだはつきりは決まっていけないのだが、たぶん九月下旬ごろになるのではないか。日程の調整を最終的に詰めているところだから、また、次に連絡をするときまでには決まっていると思う」

「そうすると、予定よりもだいぶ遅れることになりますね。日本でのアレンジメントはこの前の打ち合わせ通りで、よろしいですね。まず、鎌谷会長への表敬、石油開発公社、ニック社、千代田銀行、それに関西商事、それからコンサルティング協会といったところですね」

「うん、主なところはそんなところだが、外務省や通産省など政府関係機関とも接触したい、そこらあたりのアレンジも頼みたい」

「わかりました、手配しておきましょう。そういえば、関西商事の方に依頼してあるパイプラインの見積り、そろそろ期限がせまっていましたね。まだ、なにも連絡はありませんか……もし必要でしたらこちらの方でも様子を伺っておくことにしますが」

「いや、まだ正式な回答はない。そう、君の方からも催促してくれないか」

「それからテクニカル・ミッションのメンバーのことですが、あなたも団長として同行されると考えておいてよろしいですね」

「今のところその予定だ。東京で会えることを楽しみにしている。そう、これは最初にいうべきことだったが、今度のデリゲーションにはジェーナも参加することになっているんだ。どうた、これはグッドニュースだろう」

そういうと、レピカは大きな声を上げて笑った。いかにも愉快そうな笑い方だった。東京に来てから早くも半年を越える。ジェーナとは時どき、電話で話をしているのだが、怪しいホテルでの一人暮らしのせいか、懐かしくジェーナのことが思い出された。

「それでは、来週のこの時間にまた連絡する」

そういうと、突然レピカの電話は切れた。二人のやりとりはいつもこんな調子

で終わる。高層ホテルの窓から見える東京の街並は、ネオン灯の光りでまばゆく照らし出されていた。小川は深いため息をついた。

それにしてもレピ力は借款の話をいとも簡単に考えているようだった。国際的には完全に孤立してしまったメキシコなんぞにいったいだれがカネを貸してくれるというのか。情勢はそんなに甘いものではない。デフォルトに踏み切るに際して、そのあたりのことを充分に検討したのかどうか、疑わしいものだ。

だいたいが、デフォルトを実施すること自体、最初に打ち合わせたストーリーにはなかったことである、だから小川にとっても寝耳に水だった。あのデフォルト宣言のせいで、それまでは順調に進んでいた東京での工作も完全に暗礁に乗り上げた形となってしまった。実際のところ腹立ちさえ覚える。

だが、そうもいつていられないのが、小川の立場だった。テクニカル・ミッシヨンが来日するまで、一カ月と少しの時間はある。それまでに何とか形をつくっておく必要がある。だが、肝心な鎌谷までが、どうやら逃げ腰のようだ。正直いって、八方手詰り状態である。

ここらあたりで戦略を大きく転換する時期に来ているのではないか。正面から天然ガスの開発計画を打ち出し、それに対して協力を求める、その方がたとえアメリカによる妨害があったとしても、計画はスムーズに運ぶのではないか、小川にはそう思えた。しかし、メキシコ・シティの連中は納得はすまい。説得するには、これまた時間を要する。そう考えると憂鬱ですらあった。

「情報操作か……必要ならばそれも仕方があるまい」

小川はつぶやくようにいった。小川はしばらく考え込んでからやおら受話器を握り、ダイヤルをまわした。無機質な呼び出し音が途切れ、交換手が電話口に出た。

「もしもし、朝毎新聞ですね、経済部の岡崎さんをお願いします」

カン高い声の交換手が、事務的に岡崎の名前を復唱すると、すぐに経済部につないだ。電話口に出たのは岡崎の同僚のようで、八時近くにならないと社の方には戻らないのではないかと、答えた。時計を覗いてみると、まだ七時を少しまわったところだった。そうすると、一時間近く待たなければならぬことになる。

小川はホテルの部屋番号を相手に伝え、部屋で待つことにした。

八時を少しまわったときだった。突然電話が鳴った。小川は弾けるように受話

器を取り上げた。岡崎だった。岡崎とは大学でクラスが一緒だったという程度で、学生時代はそれほど親しい関係にあったわけではない。

それが何かと親交を深めるようになったのは、確かメキシコ資源開発プロジェクトが動きだした、十年ほど前のことだったと思う。あるパーティの席で二人はぱったり顔を合わせた。それが契機だった。確か岡崎は日経連クラブ担当の記者としてエルネギー関係取材していた。

岡崎はさすが経済記者だけに、政財界の内情に精通していた。それによく仕事もできた。だから政財界の微妙な動きを知る上で、小川にとって何かと便利な存在だった。もちろん、岡崎にもメリットはある。日経連が絡んだ大型プロジェクトをいち早くスクープできたのも、実をいうと小川の情報によるものだった。いつてみれば、二人はあいみたがいの関係にあった。そんなこともあって、帰国するたびに情報交換の機会をつくっていた。

「小川君か、俺だよ、岡崎だ。ずいぶん豪勢なホテルに宿泊しているんだね。どう、時間をつくってくれないか。なにやらメキシコもたいへんな状態にあるようだし、こつちもちようどぜひ君の意見を拝聴したいと思っていたんだ」

「うん、それは構わないが、そつちこそ時間があるのか」

「大丈夫だ。野暮な商売なもので……特集の締切があるものだから、そうだね、これから一時間後だったらそつちにいけると思うんだが、それでよかつたらぜひ会いたい」



会う場所はホテルのレストラン・バーに決めた。先に食事を済ませておくことにした。小川はレストランに入った。時間が時間だけに、レストランはかなりの混雑だった。

小川は久しぶりで、ゆつたりした気分で食事を採った。食事が一段落して、コーヒーを飲みかけたとき、岡崎がレストランの入口に姿をみせた。岡崎はひときわ大きく手を振った。急いできたためか、呼吸に乱れがある。

「ビールを頼む」

岡崎はボーイにそういうと、小川の前に腰を下

ろした。

「しばらくだった、元気そうだね」

「まあまあ、というところだ。で、今回はどんな用事で……」

岡崎は探るようにそういった。小柄な体躯だが、いかにも精力的な面構えだ。実際、実に精力的で、行動力もある。商売柄そうなのだろうが、目つきは鋭い。小川は一気に飲み干した岡崎のコップにビールを注ぎたしながらいった。

「日本に資金協力を願いたい、それが今回の目的というところだ」

「冗談だろう。いくらなんでもデフォルトを宣言しているようなところに力ネを貸すものが出てくるはずもない。酔狂にも力ネを貸す相手が見つかったというのだったら、これはたいへんなスクープに違いない。それが事実ならば、この首を掛けてもいいぞ」

そういうと、岡崎は大きな声を上げて笑った。挑発的なもののいい方だが、明らかに冗談の響きがあった。

「それが本当だったらどうする……」

小川は真顔でそういった。断定的に切り返した小川の気迫に押されてか、岡崎は一瞬息をのんだ。そこで岡崎は改まった顔でいった。

「現状から考えれば、喉から手が出るほど外貨が欲しいことはわかる。何しろ信用状すらストップしているのだから、その意味では借款を申し入れること自体、まったく有り得ない話だとは思わないが、まず、まともに相手にするところが出てくるかどうか。率直にいわせてもらえば、日本の銀行にしてもそんな冒険を冒すようなところはないと思うね」

「しかし、それは条件次第ではないかね……たとえばだよ、メキシコでとてつもない巨大なエネルギー資源が見つかったとする。それを担保にした場合、国際金融筋も指をくわえて見すようなことはすまい。それでなくともメキシコに対する貸し込みをどう処理するかで困惑しているというのが実態だろう。ともかく資源があるなら、それを担保に不良債権を回収する、それが商売人の考え方というものだろうに」

「なるほど、エネルギー資源か。しかし、メキシコについていえば、石油にしてもほとんど可能性がないという結論が出ている。たとえ可能性があったとしても資源の埋蔵量はさしたるものではない。そういうことでメジャーは撤退したはず

だったね。それは君自身がよく知っていることではないか。それとも新しい油田でも新規に発見されたともいうのか。その後、メキシコでは資源開発投資が行なわれたというようなニュースは聞いていないし、そうだとすれば資源の可能性はまったく考えられない、そう思うのだが」

新聞記者らしく、岡崎は理詰めで迫ってきた。

「君がいうように、メジャーが撤退したあと、確かに資源開発投資は継続されなかった。が、エネルギー資源の埋蔵の可能性は少ない、そう断定したのは後にも先にもメジャーだけだよ。メキシコ政府を含め、メジャーの発表をだれも確認したわけではない。第一詳細なデータはいつさい発表されていない。考えてみれば、これも不思議なことだと思わんか」

「その通りだが、それで……」

「海千山千の彼らのことだ。彼らが発表したことが真実であったかどうか、疑問が残る。これはあくまで仮説だが、メジャーが探鉱を行った油田のうち、あるいは試掘に成功した油田があったかもしれない。だが、メジャーは沈黙を守ってメキシコから撤退した……ということになればどんなシナリオが描けるかだ」

「つまりメジャーは 隠し油田 を残して撤退した、そういうことか」

「いや、これは単なる仮説にしかすぎない。今いったことが事実だとすれば、メキシコにカネを貸してくれるような酔狂な銀行屋が現れてもいいのではないか、そんなことを妄想していたんだがね」

瞬間、岡崎の表情が変わった。ビールの入ったコップを握る手がわずかにふるえているようでもある。岡崎はひと呼吸おいていった。岡崎の声が大きかったためか通りかかったウエーターがちょっとびっくりした顔をした。

「ちよつと待ってくれ、君のことだからどうやらその話はただのたとえ話ではなさそうだ。よかつたら詳しく聞かせてはくれないか。僕にも少しこれには心当たりがあるもんでね」

さすがに理解が早い、手ごたえは充分だ、と小川は思った。ここでどの程度まで計画の内容を話すべきか、小川にはちよつとした迷いがあった。だが、中途半端に話すよりは、この際だからある程度は計画の内容を明らかにしておくべきだろう、小川はとっさにそう判断した。

それに先ほどの電話でのやりとりだと、レピカもマスコミに協力を求めるとい

うことでは、反対はすまい。それに岡崎の話の様子からすると何か掴んでいるようでもある。

「心当たりがあるとかいったね、それはどういうことかね」

「うん、あれは確か一カ月ほど前のことになるが、あるパーティで、千代田銀行の石井頭取が日東経済研究所の児島所長に、鎌谷日経連会長がメキシコのエネルギー問題に熱を上げ始めているとかいってばやいていたのを小耳にはさんだんだ。僕が途中で二人に近づいたもんで慌てて話を止めたもんだから、最後までは聞けなかったんだが……今君がいったことと関連がある、僕にはそう思える」

「ほほう、石井頭取がそんなことをいつていた……」

小川はそういつて岡崎の言葉を促した。岡崎はかまわず続けた。

「それに以前から不思議だと思っていたんだが、メキシコ政府がなぜ、突如としてデフォルトを宣言したかだ。まともに考えれば、まず成算はない、それにもかかわらず敢えて踏み切った。要するにその根拠、つまりメキシコ政府はえらく強気なんだが、この裏には何かある、そう判断した……そこでつながるのが君のた

とえ話ということだ」
しばらく間をおいて、小川は意を決したように口を開いた。岡崎も構えたような表情で、小川の言葉を待った。

「ずばりいおう。メキシコには十五兆立方を超える天然ガスが存在することが最近になってわかった。この天然ガスは米系メジャーが探査して発見していたものだが、資源政策を巡って米墨関係が悪化したため、三年ほどまえ彼らが途中で放棄したガス田だ。今度のデフォルト問題とは直接関係はないが、これだけの資源があれば、メキシコ経済の再建も真剣に考えられるわけだ。それで日本に協力を求めることにした……そういうことだ」

岡崎は自分の考えていることを隠せない正直なたちのようだ。表情は興奮ぎみだった。それに職業的な習性もあるう。背広の内ポケットから手帳を出すと、獲物を狙う鷹のような素早さで、やおらメモを取り始めた。

「十五兆立方か、凄い量だ。で、そのガス田はどこにあるんだ、その場所のことだ。それから埋蔵量をどんな形で確認したのか、それも知りたい。その借款の話のことだが、日本以外ではどんなところと話を進めているか、そこらあたりのことも教えてはくれないか」

やはり岡崎は飛びついてきた。想像以上の反応だ。種明しをしてしまえば単純なことでもしろくもなんともない話である。少し相手をじらした方がこの場合、真実味を増すというものだ。

そう思い、小川は内心苦笑しながらいった。

「おいおい、岡崎君、まさか記事にするつもりではないだろうね。今の段階ではちよつと困るんだ」

「構わないではないか、なぜなんだ……？」

「借款の話にしても、まだ、流動的な面が多いんだ。今記事にされると、この話は潰れてしまう可能性もある。だからというわけではないが、記事にするのはちよつと待つてほしい」

嘘をいつているわけではないが、小川のいい方には少しオーバーで、いささか芝居がかったところがあつた。岡崎と言えば真面目である。キャンドルの灯が興奮ぎみの岡崎の顔を照らして行いた。

「そういうことか……だが別段、機密に属するようなことを聞こうとしているわけではない。要するに事実関係の確認をただけの話で、特別、職業的な関心から君の話を聞こうとしているわけではない。記事にするなというんだったら、それも考えようではないか」

そこで小川は再び渋い顔をつくつて、しばらく考え込んだ。

「困つたなあ、まずいことをいつてしまったようだ。君が相手では仕方がない。まあいいだろう」

小川はそういうと、天然ガスが発見されたいきさつをかいつまんで話した。岡崎はいちいちうなずきながら、メモ帳にボールペンを走らせていた。とくに興味を待ったのは、やはりメキシコの政情の行方の方だった。ことにメキシコを巡る米ソ関係に触れたときには、軽い唸り声を上げた。

「そうか、だいぶ複雑なんだね。内部的に言えば、民族派と親米派との闘いということか。なるほどね、それで日経連はこの問題に関してどういった立場というか、この場合どつちのスタンスに立っているのかね、それによって借款の問題にも微妙に影響が出てくるんじゃないの……」

「それはいわずもがなだろう。立場ははっきりしているさ。実をいうと、今日も鎌谷会長に会ったんだが、どうも煮え切らないんだ。こういう状態だからこそア

メリカに対する気兼ねというか、遠慮もあって動けない、なさけないけどそれが日本の実態のようだね」

「なるほどね……」

「やはり日本で開発資金を調達するのは無理かもしれない」

「そうだろうか、メキシコに膨大な資源が存在する、そのことがはっきりしているんだったら、話は別だと思ふよ。僕が日経連の会長だったらこの話にすぐにも乗る、とくに中東情勢は流動的だからね」

「という……」

「君、通産省が中東で新たな騒乱が発生することを想定したシミュレーションを実施している……この話は知っているか。厄介なことだが、中東でとんでもない事件が起こる気配が濃厚なんだ。シミュレーションも実をいうと、そうした事態を想定して実施したものと、僕は判断している」

「それはエネルギーに絡んだ話と理解していいんだね」

「その通りだ。メキシコがえらく強気なのは、たぶん、そうした情報が入っているからだ、僕は考えたからこそ、さっきはそういつたんだが……それだけ大規模な天然ガスがあるんだったら、強気になるのも当然だろうね。実際の話、アメリカの金融封鎖なんぞ、屁とも思わないだろう」

小川は同じ意味のことを山元もいつていたのを思い出した。それからもうひとつ思い当たることがある。確かあれはデフォルトを宣言した直後だった。レピカが例の定期連絡の電話で、メキシコにツキがまわってきたとか、意味ありげなことをいつていたことも気にかかることだ。

デフォルトに踏み切ったその理由、考えてみればそれは岡崎のいう通りだと小川は思った。そうだとすれば確かに辻褄は合う。問題は中東情勢の趨勢だ。どういう展開をみせるのか。果して通産省が実施したというシミュレーションはどんな結果に終わったのか、小川には興味があった。それにしてもメキシコ・シティの連中は、たいへんな賭けに出たようだ。

「原油の生産高でいえば、中近東の比重は依然として大きい。だから仮にそうした事態が起こればたいへんなことになる。これは深刻にならざるを得ない、とくに日本の場合だね……」

「そこまで見越したうえで、メキシコがデフォルトに踏み切ったというんだった

ら凄い策士がいることになる。で、このストーリーを考えたのは、小川君、実をいうと君自身ではないか」

岡崎は探るような目でそういった。

「いやいや、それはとんだ濡衣ぬれぎぬというものだ。第一、それは買い被りかぶというものだ。それよりは実際のところどうなっているんだ。イランとイラクの関係も膠着状態にあるし、対イスラエルとアラブ諸国との関係もとりたてて問題があるとは考えられないし、平穩無事とはいえないまでも、不測の事態が起こるとは考え難いように思える」

小川の言葉に軽く頷き、岡崎は小太りな体を揺すりながら言葉を続けた。それはいかにも自信に満ちたい方に聞こえた。

「国家と国家の関係からいえば君のいう通りかもしれない。が、問題となっているのは少数過激派によるテロリズムなんだ。これが一番たちが悪い。大国といえどもテロリズムには手も足も出ないからね。とくに宗教的信念から暴走するテロは怖い。歯止めがないからね」

「なるほどね。それで通産省が実施したとかいうシミュレーションはどういう結果に終わったのかね」

「うん、正確には掴んでいないんだが、簡単にいえばテロリズムが暴発した場合それにどう対処するか、それを産業活動と国民生活との関連でシミュレーションを実施したと聞いている」

どうやら立場は逆転したようである。今度は小川が聞き役の立場だった。

「どうもポイントが明確でないように思える。で、テロといっても無差別に相手を攻撃するわけではなからう。その中東のイスラム過激派はいったい何を攻撃目標にしているかだ」

「そこなんだ、問題は……昨年、ホメイユ師が死んだ後、イランの革命派が大きく二つに分裂したことは知っているね。問題は少数派となつて、イランから放逐された連中だ。彼らはイラン南部の砂漠地帯を拠点として、イラン国内だけでなく、行動の範囲を国際化しつつある。とくに注目したいのはヨーロッパの過激な左派グループと提携を強めていることだと思う」

岡崎がいうように中東情勢は複雑だった。長かったイラン・イラク戦争はともかくも停戦に向けて動き出しつつあった。停戦のリーダーシップを握ったのがサ

ウジだった。が、せっかく用意された交渉のテーブルもイラン国内の過激派グループが猛然と反対したため交渉は暗礁に乗り上げていた。問題はやはりイラン過激派がどう行動するかにかかっていた。

「彼らは攻撃目標をどこに定めているか、それが問題のような気がするが」

小川は再び同じことを聞き返した。

「大雑把ないい方をすれば、停戦のテーブルを用意したサウジを許せないということではないかね。この場合、サウジが用意した和解交渉の背後にアメリカがついていることも彼らの神経をさか撫でた。これはイスラム理念の裏切りに彼らには見えるわけだ。しかも彼らは宗教的理念を規範とする盟約者の集団である。宗教というやつは結局、理性の領域を超えた行動様式をとるものだ。だから孤立すればするほど、宗教的理念は純粹昇華し、殉教者としての気分が盛り上がることになるんだろうね」

だからその分だけ過激になるんだろう、と岡崎はいった。岡崎は雄弁だった。酒のせいであろう。岡崎の目元は真っ赤に染め上がっていた。さらに岡崎は言葉をつないだ。

「ムジャヒディン（戦士）の使命とはシオニズムやアメリカ帝国主義に対するジハド、つまり聖戦だ。たとえ死んでもシャヒードになって永遠の生命を得ると信じればこそ爆薬を満載したトラックもろともイスラエル軍やアメリカ大使館に突入したんじゃないか」

小川はその通りだと思った。頻発するテロ事件にたまりかねて、八〇年代の後半に入ってから以降、国連などでも国際テロを糾弾するいくつかの決議案が採択された。米ソ両国もことあるたび、テロリストを非難する声明を発表していた。だが、西側諸国がいくらテロ行為を糾弾したところで、まったく異なる価値観と行動基準を持つ彼らには、痛くも痒くもないようであった。残念ながらテロ行為に対してはあまりにも無力ということである。

しかもこの場合は困ったことに、テロは組織された行為である。現代のテロは攻撃目標、攻撃手段、攻撃範囲など、地球的な規模での広がりを見せている。核兵器が全地球をくまなく覆い尽くしたように、テロもまた人類の頭上に重くのしかかってきたというわけだ。岡崎の話には頷けるところがある。

とくに八五年以降、テロ件数は急激な増加をみせている。ひとつには岡崎がい

ったような急進的イスラム教徒、それに西欧の過激左派グループ、これが連動してテロ行為をさらに過激化させている。戦術もエスカレートしているように思えて、不気味だった。

「米国調査機関のあるデータによると、八六年に起こったテロ事件は、一千件を超え、犠牲となった死亡者は実に二万数千人、負傷者を含めれば十万人を超える、と書いてあった」

岡崎の上げた数字に率直にいつて驚いた。凄い数だ。一年間の犠牲者の数でいえば、あのベトナム戦争での米軍の犠牲者の数に匹敵するではないか。

「要人や軍事基地など重要施設の警護が厳重になるにつれ、対象を特定しない無差別テロが顕著に増えている。とくに最近では軍事施設に対する攻撃よりは、産業施設を攻撃目標とするようになってるのが特徴だ。産業施設は警備が手薄だということと合わせ、経済社会に与える効果が大きい。つまりテロ攻撃の対象がいつそう拡散しているというのが最近の傾向なんだ」

そうなれば、航空機乗っ取りなど、まだ可愛い方である。岡崎の話ではテロが頻発することで、石油情勢が変わりつつあるという。皮肉なことだが、それによってメキシコは数われることになるのかもしれない。小川は少し複雑な気分になった。

「実をいうと、こんな物騒な話もあるんだ」

岡崎は幾分間をおいていった。興奮で顔が歪んでいた。

「スウェーデンの原子力発電所の使用済核燃料が何者かによって、奪われたという話を知っているか。あまりにも事が重大なもので、結局、公表されなかったが、噂によると、これが西ドイツの過激派グループの手を通じて、イランのイスラム革命旅団とかいう組織の手に渡ったということらしいのだ」

だいぶ前のことになるが、アメリカの大学生が『原爆の製造法』なるパンフレットを出版して話題を呼んだことを小川は思い出した。ある種のブラックユーモアだったが、世間に与えた衝撃は大きかった。

「が、素人でもそれをつくることは可能なんだろうか」

「もちろんだ。使用済核燃料、これが手に入りさえすれば、そこその原子力工学の知識でも、大学生程度の知識があれば原爆製造は簡単にできる。使用済核燃料はプルトウムの塊なんだ。起爆剤を使って中性子を吸収させれば、たちまち

のうちに核分裂を誘発させることができる。技術的にはそんなに難しいことではない」

岡崎はあっさりといった。使用済核燃料をイランの過激派が入手したとなればこれほど物騒な話はない。小川は思わず唸り声を上げた。二人の間に言葉が途切れ、沈黙が続いていた。キャンドルの灯が二人を揺らぐように照らしだしていた。

(つづく)

小説 国際プラント・ビジネス戦争（十五）

杉田望

炎上する油田

「ただ今入りましたリヤド発外電によりまずと、サウジアラビア最大のフル油田が何者かによるミサイル攻撃を受け、炎上中と伝えられます。油田は相当な被害を受けた模様です」

ニュースが入った時刻はちょうど午後八時を少しまわったところだった。現在、油田は炎上を続けており、どの程度の損害を受けたか、回復にはどの程度の時間を要するか、また、最大の関心というべき原油生産に与えるダメージはどの程度か、現在までのところ確実な情報はない、と臨時ニュースは伝えた。

「えらいこった」

素頓狂な大声を張り上げ、だれかが叫んだ・関西商事の機械本部のある五階フロアは十一月の月次決算が追っていたこともあって、大半のスタッフは残業で居残っていた。何事が起こったのか、全員が一斉に振り向いた。事態を呑みこむやほば全員が総立ちとなった。やおらテレックスルームに走るものもあった。部屋全体が騒然とした空気に包まれた。

「まさか……」

今田は低くつぶやくようにいうなり、会議室に走った。テレビの前には人垣ができていた。さすがに商社マンらしく、ほぼ全員が敏感に反応した。いったいどうなっているのか、息を呑んで続報を待った。テレビ画面にはワール油田の長閑な風景が映し出されていた。



衝撃波はたちまちのうちに社内に流れた。テレックスは、世界各地に平ユースを求めて唸り声を上げ、激しいやりとりを繰り返していた。リヤドとの通信は途絶していた同じく周辺地域の通信も呼び出しに応ずる気配はない、中東地域との通信は完全にストップしているようだった。

しばらくして、続報が入った。ワシントンからの情報によれば、ホワイトハウスは中東情勢が最悪の事態にはいったとの判断から、米国の緊急展開部隊が大統領の出撃命令を待って待機中であると、伝えていた。さらに続報が入った。今度は緊急展開部隊が出撃を開始したと伝えた。かし、ホワイトハウスはまだ、沈黙を守っているようだった。

今田は会議室にセットされているテレビに釘づけとなって、ニュースに聞き入っていた。ロンドンはちょうど、ビジネスマンたちがオフィスにたどりついたばかりの時刻のようだった。やはりロンドンも東京と同様に情報不足に悩んでいるようだった。古めかしいシティの金融街をバックに現地報告をする特派員の表情はもうひとつ冴えなかった。

パリやベイルートなど、その他の都市から入る特派員報告も似たりよつたりの内容で、ワシントンの情報を別にすれば目新しい情報はない。こうなると巨額な資金をつぎ込んで構築したニュースネットワークもさして当てにはならない。

テレビ放送は娯楽番組を中断、サウジアラビア関係のニュースに切り替えられていた。不安なのは現地の様子である。が、テレビは同じ内容のニュースを繰り返すのみで、肝心な現地の状況は少しも伝えられない。新しい情報が入っていないのだからこれも仕方があるまい。

したり顔の評論家がテレビの画面に登場、何やら意味ありげなことをしゃべっていた。だが、少しも要領を得ない。原油生産の技術的なことを素人向けに解説するのに留まり、今回の事件は偶発的な事故ではないか、と楽観論に終始しているようだった。

少なくとも今田にはそうは思えなかった。いつの間にか、会議室では議論の輪ができていた。だれもが興奮していた。自然に今田のまわりに人垣ができた。同じエネルギー機器部の長谷川が質問を浴びてきた。今田の脳裏に浮かんだのは、ケネディ空港で交わしたカール・ルビンズとのやりとりだった。そのとき、会議室のドア越しに鈴木副本部長の姿が見えた。なにやら今田に向かって手招きをし

ている。

「今田君、ちょっと……」

鈴木則本部長は低い声で今田を呼んだ。小柄な体が全身緊張に包まれているようだった。鈴木は大きく頷きながらいった。

「知つての通りの事態が発生したので、緊急エネルギー関係者会議を開くことになった。それで君にも出席してもらいたい」

「わかりました」

今田は鈴木の後続いた。事件発生第一報が入って、すでに一時間半余りがたっていた。関係者が続々と炭素燃料本部の会議室に入ってきた。たぶんいったん会社を出て、それから戻ってきたものもあるようだった。業務企画本部長の新井常務は酒気を帯び、顔を真っ赤に染め上げていた。炭素燃料本部長の高田専務、それに大園副社長の姿もみえた。

総勢二十名ほどが会議室に顔を揃えた。司会の高田専務が務めることになった。まず、最初に業務企画本部から事件発生経過、海外支店や駐在員事務所などから入った情報などを紹介した。だが、先ほどのテレビニュースとほとんど変わらない内容だった。誰が事件を仕掛けたのか、ワール油田の被害の状況など肝心なことはなにもわかっていない様子だった。

「一カ月もあれば、修復可能ではないかね。こんなことで大騒ぎするほどのこともないではないか、そう思うのですが、どんなものでしょうかね」

あらかた、関係部門からの報告が終わった段階で、そういったのは新井常務だった。高田専務は考え込む様子をしてはいるか、特段の発言はしなかった。重い沈黙が続いた。

「今田君、君の意見を聞きたい」

突然、指名したのは大園副社長だった。今田はちょっと驚いたが、すつくと立ち上がり、高田専務に改めて発言を求め、おもむろに切り出した。興奮で声がうわずっていた。

その同じ時刻、霞が関の通産省旧館五階、資源エネルギー庁石油部計画課は重苦しい空気に包まれていた。課長の西尾泰三はワイシャツを捲り上げ、激しい調子で電話口に向かって怒鳴っていた。

外務省とのやりとりのようだった。外務省の公電ではさっぱり要領を得ない。怒りは頂点に達しているようだった。午後九時から省議が始まる。それまでに何とか状況を把握しておきたかった。首相官邸からもワール油田が壊滅的打撃を受けた場合のエネルギー需給関係にどういった影響が出るか、回答を矢の催促で追っていた。

まず、把握しなければならないのは、現地の状況である。断片的に伝えられる外務省の公電からでは、何の判断もできなかった。通産省の海外出先機関に連絡を取ってみたのだが、何の応答も返ってこなかった。

「ようし、それではフル油田が全滅したという前提に立って、シミュレーションを開始する。まず、備蓄班は原油備蓄の洗い出しを、それから原油の需給関係を、総括班は引き続き現状把握に当たってくれ」

西尾はそういうい終えると、計画課の隣にある別室に入った。やώρα電話を取り上げ、ダイヤルをまわした。番号はアメリカの東海岸のようだった。流暢な英語が口から飛び出した。

「カール・ルビンスは……？」

「どちら様でしょう」

「日本のMITIの西尾です」

「しばらくこのままの状態でお待ち下さい」

女性の秘書はそういつて、回線を切り替えた。電話口から聞き覚えのあるBG Mが流れてきた。五分ほども待たされたであろうか。苛立ちを覚え始めたとき、電話口にカールの声が聞こえてきた。

カールとのつき合いは長い。西尾がワシントンの日本大使館に勤務していたころからのつき合いだから、かれこれ十年近くになる。どうやら国務省の調査機関に關係している人物であることはわかっていたが、西尾は情報収集の必要からそれを承知でつき合ってきた。

「たぶん君から電話が入るんじゃないかと思っていた」

「さつそくだが、少し事態を説明してくれないか」

「今回は少し高くつくぞ、それでもいいか」

「かまわない」

「詳細は我われも掴んでいない。ミサイル攻撃や空中投下だったら軍事衛星で解

析も可能なんだが、分析結果は白だった。だからこれは地上で爆破したのではないかと判断している」

そうだとすれば、軍事衛星で追跡できないのも当然だろう。地上をはうようにして行動するテロ活動は、世界最強の軍事技術と監視体制を備え持つアメリカにしてもお手上げということなのだろうか。爆薬を仕掛けたコマンダーたちは、死を覚悟の上での行動であつたに違いない。西尾の頭をかすめたのはワール油田が最悪の状態になつてのことだった。

「いつたい、それは……」

「原子爆弾らしいんだ。だから放射能汚染が問題となつてゐる。少なくとも油田の修復には数年を要することになるだろうね。悪いことに低級な核爆弾のようだから放射能汚染は想像を絶するひどい状態にあるようだ」

西尾はうつと息を呑んだ。カールがいったことが事実だとすれば、ワール油田は地上から消滅したことになる。サウジアラビアはもとの砂漠とラクダの国に戻るのか。西尾は背筋に冷たいものが走るのを覚えた。

「そんな乱暴なことを誰が仕掛けたのか」

「詳細は把握していないが、イスラム革命旅団とか名乗る連中らしい」

西尾には聞き覚えのない組織だった。

「いつたい、何の目的で……」

「それがわかつたら苦労はないさ」

西尾の額には脂汗がにじみ、電話機を握る手が汗でじつとりと濡れてきた。核兵器で攻撃をかけたのだとすれば、ワール油田はすでに壊滅したとみななければならないだろう。いくら石油の需給が緩んでいるとはいつても、経済に与える打撃は想像以上に大きい。

カールは米国の緊急展開部隊が二十時間以内に現地に到着する予定だから、詳細が入り次第、また連絡する、といって電話を切った。電話の様子だと、重要会議の合間をぬつて、西尾の電話に出たようである。西尾は受話器を握つたまま、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

計画課がなにやら騒々しい。新聞記者が押し寄せてゐるらしかった。西尾はドアを蹴破るようにして廊下に飛び出した。新聞記者たちが一斉に西尾の後を追つた。西尾は完全に記者たちを無視した。あまりにも凄い形相だったせい、一瞬、

記者団はたじろいだ。いつもは温厚な西尾にしては珍しいことだった。

「課長、事情を説明願えないでしょうか」

そういったのは、朝毎新聞の通産省詰めのカップの岡崎だった。それでも西尾はいつさいを無視して、省議室に向かって歩きだした。記者たちから罵声が湧き起こった。西尾の前に立ちほだかり、彼らは激しい勢いで詰め寄ってきた。険悪な空気となった。総括班長の守谷が必死で記者団を押さえ、西尾に道を開けた。

新館十八階に省議室がある。西尾が部屋に足を踏み入れたとき、すでに省議は始まっていた。

渋い表情の長田事務次官が円形テーブルの中央に陣取り、杉上通産審議官、佐藤資源平エネルギー庁長官、吉田官房長など主要幹部が序列通りに並び、それを囲むようにして各局局長が着席していた。

説明にあたっていたのは官房長の吉田だった。西尾は背を屈めるようにして、席についた。佐藤長官の真後ろが西尾課長の席である。横に並んで座る同期の公益事業部の中島計画課長は西尾の姿を認めると無言で頷いた。省議の空気は全体として重く沈んでいた。

「まだ、事件の詳細は把握できていませんが、とりあえず最悪の事態を想定しておかなければならないだろうと思います。差し当たって問題となりますのは原油の供給体制です」

そういい終わると、吉田官房長はいったん言葉を切った。緊張で顔が歪んでいるようにみえた。長田次官は相変わらず寡黙だった。佐藤長官はテーブルの上に配布されてある資料に目を通してながら盛んに首を振っている。

「それではここで、原油備蓄の状況を確認しておきたいと思いますが、資源エネルギー庁の佐藤長官の方からご報告願えればと思います」

手にした書類を丸めながら佐藤長官がゆったりと立ち上がった。佐藤の物腰はどこか尊大で古武士の風格がある。その威圧的な態度は錯綜する業界関係者の利害調整の場面などでは抜群の効果を発揮した。佐藤にはそういうことを楽しんでいるところがある。

「ご承知のように、原油備蓄には万全を期していますので、当面、産業活動や国民生活上で問題が起こるようなことはございません。少なくとも十カ月程度は大丈夫だろう、資源エネルギー庁としてそのように判断しています」

続いてエネ庁次長の峰田が備蓄基地別の詳細な数字を紹介、現在のエネルギー需給関係からみて、十カ月という数字はかなりゆとりのあるものであることをつけ加えた。

「それはエネ庁が行ったシミュレーション結果に基づく判断だと、そのように理解してもよろしいですね。繰り返しますが、当面、エネルギーの需給関係に問題が起こるようなことはない、そのように考えてよろしいですね」

駄目押しのいったのは吉田官房長だった。吉田官房長は昭和三十六年入省だから佐藤長官の二年後輩にあたる。次の次は事務次官、というのがもっぱらの評判だった。省内はもとより、世間でも切れ者として知られていた。

「その通りです。ただ今中し上げたように今回の事件を契機に極端な原油不足が起こり、経済社会活動に重大な支障が起こるようなことは考えられないというのが第一次シミュレーションの結論です。ですが、こういう場合は、いくつかのシナリオを用意しておく必要があるわけでして、懸念されることは心理的要因と申しますか、産業界や国民が今回の事件をどのように受け止め、行動するかです。そこらあたりの判断を確かかなものにするため、いくつかシナリオを準備中です」
そう答えたのは峰田次長だった。

「その前提条件を伺いたい」

今度は佐藤長官自身が答えた。

「十カ月以内に油田が修復、事件以前の生産力を回復する、それが前提です」

西尾は佐藤長官の話の間合いをみて、急いで書き留めたメモをそつと渡した。メモの内容は先ほどカールから得た情報を簡単に纏めたものだった。佐藤長官は老眼鏡を少しずらせてメモに目を通した。ゴルフ焼けした浅黒い顔がみるみる間に堅くなっていた。

「確かな筋の情報だろうね」

佐藤は小声で、唸るようにいった。西尾は黙って頷いた。

「ただ今、石油計画課に入った情報によりますと、ワール油田は核攻撃を受けた模様でして、この情報が確かだとすれば、ワール油田は地上から消滅したとみなければなりません」

長田次官がむっくり背中を伸ばし、鋭い視線を佐藤長官の方に走らせた。出席者全員が啞然とした表情をつくり、佐藤の次の言葉を待った。緊張感が会議室を

支配した。

「いや、詳しくは西尾課長から報告させましょう」

西尾は昭和四十三年入省。秘書課の筆頭法令審査委員を経て、ワシントンの大使館で通商参事官をつとめ、帰国した後、産業政策局などふたつの現業課長を歴任、現職にあった。同期の中では出世頭である。頭は切れるが、口が悪く、人使しも荒かった。それでいて、評判がいいのは育ちのよさのためであろう。

「アメリカの情報機関が掌握している情報によりますと、攻撃を加えたのはイスラム革命旅団とか名乗る連中でありまして、地上に設置された原子爆弾によって爆破された、ということらしいのです。ですから、ワール油田は完全に消滅した、そう見なければなりません」

そこで西尾の言葉は途切れた。出席者全員がうめき声をあげた。サウジアラビアからの原油輸入量は年間百万バレル、全体の輸入に占める割合は約二十七パーセント。サウジがやられたとすれば、アラブ首長国連邦など他のアラブ諸国からの原油輸入も当分の間は困難になるだろう。今でもアラブ諸国からの原油輸入量は七十八エセントを占めている。たいへんな打撃だ。

「官邸もそのことは知っているんだろうか」

ぼそりと、呟くようにいったのは近藤官房総務審議官だった。官邸とは首相官邸のことである。官邸とのやり取りは総務審議官が窓口になっていたが、内閣官房から強い調子で現状報告とシミュレーション結果の報告を求めてきていた。だからいま西尾がいったことは一刻も早く報告しておく必要がある。近藤審議官がいったことはそういう意味のことだった。長田次官は腕組みしたままの姿勢で、重い口を開いた。

「どうやらイエローカードを準備する必要があるようだ。とりあえずこのことは大臣を通じて総理に報告しておく必要がある。官房長の方から連絡をしておいてくれないか」

吉田官房長は長田次官の言葉が終わらないうちに、白電話を取り上げていた。白電話は緊急事態が発生した際に使用する大臣に直結した電話だった。省議が始まることは既に政務次官を通じて連絡してあったのだが、まだ、大臣室に姿をみせていない。緊急連絡電話は大臣がたとどこにいても、連絡が取れる仕組みになっているので、話は伝わるはずだ。

「大臣はこちらの方に向かわれているそうです。まもなく姿をみせるのではないのでしょうか」

さすが通産省きつての能吏といわれるだけに、吉田官房長の態度は落ち着いたものだった。長田次官が軽く頷いた。イエローカードの話が出た以上、どうやら省議は徹夜になりそうな雰囲気である。

省議では『緊急エネルギー対策本部』の設置が決定された。本部長は長田次官がつとめ、これを資原エネルギー庁長官が補佐するかたちで、副本部長に就任することが決まった。最大の問題は、冬場にかけて灯油が不足するのではないかとこの不安だった。

イエローカードとは、ガソリンや灯油など石油製品の割当を決めた配給キップのことである。需給関係を人為的にコントロールすることで供給不安からくるパニックなど、最悪の事態を避ける、それが目的で構想されたものだった。だが、戦前の統制経済を思い起こさせ、必ずしも評判は宜しくない。第二次オイルショックのさいに準備したのだったが、実際には実施されず終わったという経緯があった。

長田次官はあえてそれを実施することを提案し、特段、議論もされず実施方針が簡単に決定された。第二次オイルショックの際準備したイエローカードは、大蔵省印刷局の倉庫のなかに当時のままの状態で保管されていることが、会計課長から報告された。所管は生活産業局ということになった。

すでに時刻は午後十時半をまわったところだった。どこに雲隠れたのか、まだ大臣が登庁したという報告はなかった。官房総務課長が緊張した表情で部屋に入るなり、吉田官房長の耳元でひとことふたことなにやら囁いた。吉田は大きく頷き、長田次官の方を振り向きながらいった。

「通産クラブの連中が大臣会見を求めてきているそうですが、次官の方でとりあえず会見願えないでしょうか。どうやらマスコミの方も情報不足で悩んでいるようですなあ」

「結構でしょう」

長田次官は短く答えた。

「記者会見の内容は官房総務課の方で、起案してくれないか。問題はこういうスタンスで今回の事件を発表するのだが、第一に強調すべきことは原油の備蓄は充

分あるので、国民生活には差し当たって支障は生じないこと。第二に長期的には国民と産業界の協力を得て、安定した供給体制をつくり上げること、この二点だと思うが、どうだろう」

「計画課長が報告した件は、どのような扱いにしましょうか」

そう聞いたのは官房公報課長の古池だった。

「コンファームができた情報ではないし、無用な混乱を引き起こす可能性もあるので、記者会見では特別触れる必要はないのではないか。そういう取り扱いにすることに決めます。それではこれにて省議を終えます」

官房長の吉田がそういう終えるやいなや、弾けるように全員が部屋を飛び出していった。西尾が省議案を出ようとしたとき、佐藤資源エネルギー庁長官が後ろの方から呼び止めた。

「西尾君、ちょっと残ってくれないか」

部屋に残ったのは佐藤長官、それに近藤官房総務審議官の二人だった。

「で、さつそくだが、例の話のことだが、継続して情報がとれるかどうか。いやぜひと継続して情報をとってもらいたい」

佐藤長官の言葉に近藤審議官も大きく頷いた。ワール油田が地上核攻撃を受けた事実を知っているのは、たぶん日本のなかでは通産省だけだろう。情報戦争で外務省を一步リードしておきたい、それが佐藤長官の狙いだった。ともかく事件発生から三時間近くたっているというのに、外務省からは満足な情報が得られない。その無能な情報収集には、西尾だけでなく通産省全体がiraだちの極限に達していた。西尾は当然だと思った。

「わかっています」

西尾はそう短く答えると急いで部屋をでた。来月からは予算折衝の時期だといふのに、とんでもないことが起こったものだ。今年一杯は満足に家には帰れないのではないか、西尾は苦笑いを浮かべながらエレベーター・ホールに向かった。エレベーター・ホールは薄明りがあるのみで、人影はすでになかった。

鎌谷康祐は会長執務室で分厚い調査報告書を熱心に読んでいるところだった。調査報告書の表題には『メキシコ経済の再建計画』と書かれてある。報告書は日経連事務局が日東経済研究所に委託して作成したものだった。鎌谷は読み終えた

報告書を机の上に置きながら満足そうに頷いた。

「これならば可能性がありそうだ」

口元には笑みがこぼれた。報告書はなかなかのできればだと思った。天然ガスの開発を幾つかの段階に分け、無理なく計画を進めることを指摘するとともに、計画が順調に進めば、一千二百億ドル程度の対外債務は十年から十五年で完済できると予測していた。

その根拠のことだが、石油情勢が再び経済的要因で、流動化し九〇年以降、エネルギー問題の主導権が再度資源国に戻るのではないかと書いている。報告書は恐ろしいほど正確に今日の状況をいい当てていた。

鎌谷はインターホンを使って、持たせてある客を部屋に通すようにいった。まもなく姿を現したのは千代田銀行の石井頭取だった。石井は同時に日墨経済委員会の委員長も務めていた。今日は呼び出しを受けて、鎌谷を訪ねたのである。

「やあ、ご苦労さんです」

といって鎌谷は椅子から立ち上がった。石井は恐縮したように、長身を折り曲げるようにして、挨拶を返した。会長執務室は白をベースに機能的なつくりのなかにも落ち着いた雰囲気がある。

「まあ、そこに座って下さい」

鎌谷が如才なく椅子を薦めた。

「今、メキシコ関係の調査報告書を読んでいたところです」

「はあ……？」

石井はどう答えたらよいか、わからないという表情をつくって当惑したように頷き返した。鎌谷はかい摘んで、報告書の内容を話して聞かせた。サウジ事件が起こってみると、この報告書はにわか光って見えた。

「なるほど、児島さんのところ、なかなか優秀な人材が揃っていますな」

石井は感心したような顔でいった。が、前置きはともかくとして、今日はどのような話になるのか、石井はいつものように警戒心を待たねばと思いつつ、鎌谷の次の言葉を待った。

「石井さん、私は小川君が待ってきた話に乗ろうかと考えているんだが」

一応は相談の形をとってはいるか、これはどうやら既定路線として鎌谷はこの案件を進めようとしていることは、間違いなさそうだ。サウジ事件が発生したこ

とで確かにメキシコ案件の評価は高まってきた。石井もこの話に乗ろうかと考えていた。

「ところで、だいぶ長い間放り出していたもんだから、今度だけはしっかりやってもらわねば、こまりますなあ。おなたは逃げの名人だが、今度ばかりは逃げられませんか」

鎌谷はそういうとひとき大きな声で笑った。小川にんの回答も与えず、これまでほっぽり出していたことに対する皮肉でもあった。が、石井はわりあい平然とした態度で鎌谷の言葉を受け流した。

「会長がおっしゃることに私に異存はございませんが、問題は対米関係をどう配慮するのかと、もうひとつはメキシコの政治情勢に対する判断だと思います」

「やはり心配なことはメキシコの政治情勢だろうね」

鎌谷はそういった。が、それほど深刻には思っていないようである。確かにこの数力月の経過をみると、メキシコの政情は安定化の方向にあるようだった。デフォルトに踏み切ったことが、かえって政治の安定化に役立ったのではないかとさえ思われる。

つまり民族意識をかき立てることで、国民の目は自然アメリカに向かうことになり、内部的な団結心を高めた。騒乱状態になるのではないかと、懸念された九月のゼネストも比較的平穩のうちに終わったようだ。思えば皮肉な結果である。

「それほど心配することはないように思われますが、もっとも来年春の大統領選挙がどうなるか、そこらあたりでまた、火を噴くんではないか。やはり問題は来春以降でしょうね」

「私も頭取がいわれる通りだと思う。しかし、まず優先して考えなければならないことはエネルギー資源を確保しなければならないこと、これが第一。いろいろな不安材料はありますが、そこを根本にして考えましょうや。どうもアメリカさんは日本に協力するような考えをもっていないようですね」

原油の緊急援助に関していえば、鎌谷のいう通りだった。緊急事態が発生したときなど、米国を始めOECDに参加している先進各国は石油や石炭など、相互に融通しあうことを予め決めていた。今回の場合、日本はその取り決めに大きな期待を待っていた。

ところが、事件発生後、開催された国際エネルギー機構の会議では、日本の要

望はまったく無視された形で、結局は事態の推移をみながら各国が独自に、あるいは二ヶ国間で協力しあうことが確認されただけに終わった。会議はまだ継続中だが、大きな変化を期待できないのではないか、というパリ事務所からの報告を石井も読んでいたのでそのことは知っていた。

「やはり独自に調達先を探さなければならぬようだね」

「残念ながらそのようです」

石井がそう短く答えた。そうだとすれば、アメリカに対する遠慮はいらぬのではなかるうか。誰も面倒を見てくれない以上、日本は日本の責任で自給体制を作らなければならない。鎌谷はそうした意味のことをいった。

「小川君の話だと、十二月初旬、メキシコはデリゲーションを日本に派遣することになっているそうだ。日本側の交渉窓口はあなたのところの日墨経済委員会が適当だと思いますが、どうでしょう」

「それで結構です。お引き受けします」

「そうですか、ありがたい」

「で、こういった条件で借款を出すか、ですが」

「最低でも三十万ハレル程度の原油は欲しいものですなあ」

サウジ事件が発生して、ちょうど一週間がたっていた。この間、日本政府は中国やインドネシア、カナダなどといった資源国に対して、特使を派遣するなどして懸命に原油の確保にあたってきた。しかし、これまでのところ増量に応じてくれたのは中国ぐらいなもので、交渉は難航していた。

ただ、メキシコだけはデフォルト問題を契機に、経済制裁が実施されていたため、特使の派遣は遠慮する形となっていた。しかし、考えてみればこの話、経済制裁前に先方から持ち込んできた話である。

しかも資源確保は各国の独自の努力でやるということであれば、アメリカとでも特段反対もすまいと考えるのが妥当だ。とりあえず、三十万バレル程度確保できれば、助かる。中国が十万バレルの増量に応じた。マレーシアも増量に応じそうな気配であるから、たぶん二十万バレル程度は固い。鎌谷はそんなことを頭の中で計算していた。

「まあ、そんなところではないでしょうか」

石井は鎌谷の顔を覗きこむようにして、そういった。

「具体的に借款のスキームをどのように組み上げるか、そのあたりのことは日墨経済委員会を中心に検討して頂けないだろうか」

「わかりました」

そこで二人の話は一段落した。ほぼ三十分足らずの時間だった。それでは、といって石井が立ち上がった。会長座には次の来客が持っているようだ。鎌谷は軽く手を上げて、石井を見送った。

(つづく)